

植物
防疫
講座

病害編-44

カキ病害の発生生態と防除

島根県農業技術センター ながしま 永島 すすむ 進

はじめに

カキ (*Diospyros kaki*) は東アジア原産の果樹で、我が国においては、生果のほかにあんぼ柿や干し柿等の加工品としても利用されている。

我が国でカキに発生する病害（センチュウや生理障害を除く）として、36の病名が日本植物病名目録（日本植物病理学会，2021）に記載されている。その内訳は、糸状菌 32，細菌 1，ウイルス・ウイロイド 2，病原未確認 1 で、大半が糸状菌病害である。他の果樹において、細菌やウイルス・ウイロイドは難防除病害であることが多いが、幸いにしてカキでは特に問題となっていない。良質な果実を生産するためには、病原菌の発生生態を把握し、効率的な防除を行う必要がある。ここでは、カキの主要病害 5 種と近年新病害として報告された黒星落葉病について、病徴と被害、発生生態および防除について解説する。

I 炭疽病 (*Colletotrichum horii*)

1 病徴と被害

果実に直接病斑を形成することから被害が大きい。新梢や徒長枝では、はじめ黒色の円形斑点を生じ、しだいに中央部がややくぼんだ暗褐色の楕円形病斑となる（図-1）。果実でもはじめ黒色の小斑点を生じ、徐々に拡大して中央部が濃黒色の円形～楕円形にくぼんだ病斑となり、早期に着色し落果しやすくなる（図-2）。いずれも病斑上には多湿条件で鮭肉色の粘質塊（分生子の塊）を形成する（図-3）。降雨が 5～6 月に多いと新梢、徒長枝、幼果での発病を助長し、9～11 月の降雨は果実での発病を助長する。

2 発生生態

病原菌は主に発病枝で越冬し、平均気温が 15℃ 以上で降雨があると分生子を形成する。気温が 20～27℃ で多湿条件であれば多量の分生子を形成する。分生子は雨水の飛沫で新梢、徒長枝、幼果に飛散、感染し、新しい



図-1 徒長枝での発病



図-2 早期着色した果実

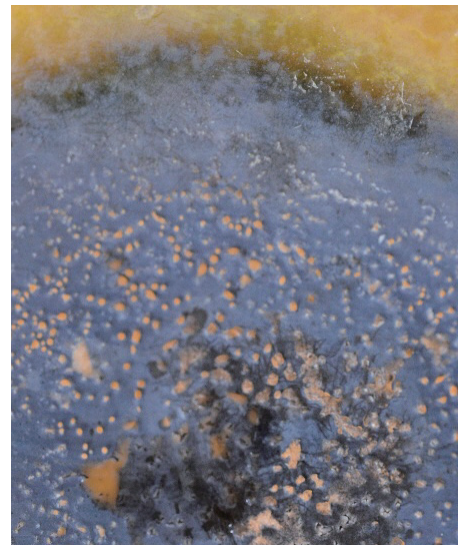


図-3 鮭肉色の分生子塊

Epidemiology and Control of Persimmon Diseases. By Susumu NAGASHIMA

(キーワード：カキ，糸状菌，発生生態，防除)